

人材確保・育成に関する保育士養成校と保育所の連携に関する研究（パート2） ～安全教育を取り入れた実習の工夫～

研究代表者	高橋 滋孝	（至誠あずま保育園園長）
共同研究者	高橋 久雄	（昭和女子大学教授）
	松田 典子	（実践女子大学助教）
	三浦 修子	（至誠第二保育園園長）
	高橋 智宏	（至誠いしだ保育園園長）
	長谷川 育代	（万願寺保育園園長）
	廣瀬 優子	（しせい太陽の子保育園園長）
	高橋 紘	（至誠保育総合研究所所長）

研究の概要

この研究は、保育士資格者の認可保育所就職率向上の方策を探るために、前年度の保育科学研究「人材確保・育成に関する保育士養成校と保育所の連携」に関する研究」を補強し、安全教育を取り入れた実習の工夫をするものである。

前年度は、保育所保育士に学生時代を振り返ってもらい実習準備と実習に対する自己評価の関係や就職意識について調査した。またこれとは別に保育士養成校の学生に保育所の就職に対する意識について調査し、結果を集計した。今年度はこれら2点の調査結果を分析した。その結果をもとに保育所の安全教育を含めた実習教育について研究を深めた。

1. 実習中の安心・安全に関する指導のあり方について検討した。そのために研究者の所属する各保育園の過去のヒヤリハット並びに事故事例を集計した。発生時間と発生曜日をグラフにしたところ、各園の特徴が確認できた。全体に集計しなおすと、木曜日と金曜日が多く、時間では10時・11時台が多かった。これにより事故発生の曜日や時間帯の特徴を学生に伝えるなど、実習指導に役立てることができる。

2. 昨年度のアンケートは、保育所保育士に学生時代を振り返って保育実習に関する質問をした。実習の準備をよくした学生は実習の自己評価が高く、就職意欲に結びついているという先行研究とほぼ同じような結果が確認され、保育士養成校時代のよい実習体験が保育所への就職意欲に結びついていることが示唆された。就職について、学生時代に保育所保育士になるという気持ちの変化を問う項目では、最初と最後の実習後で有意な差がみられた。実習を就職につなげるためには、保育所として実習生にどのような指導をするか工夫が必要であろう。養成校には実習を受けるための事前の指導で意識的によく準備させておくことを提案したい。

3. 前年度のアンケートで、養成校の学生に、保育士志望動機や実習・ボランティア経験等の質問項目に回答してもらった。アンケート結果は時間的な関係で単純集計にとどまったが、学生の将来の就職と就職後の意識を確認した。保育士志望動機の87%が「子どもが好き」であった。今回、学生の就業志向別に分け分析を行った。結果、仕事を続けたいと思う学生は、長く勤められる育児支援制度の充実などの就業条件を重視し、離職や結婚で仕事を辞めてから再度働こうと考えている学生は、家からの近さなど立地条件を重視して就職先を選ぶ傾向がみられた。

キーワード：安全に関する実習教育、ヒヤリハット、保育実習前の準備、就職意欲、職場環境、就業条件

はじめに

この研究は、保育士資格者の認可保育所就職率向上の方策を探るために、前年度の保育科学研究「人材確保・育成に関する保育士養成校と保育所の連携」に関する研

究」を補強し、安全教育を取り入れた実習の工夫をするものである。

前年度は、保育所保育士に学生時代を振り返ってもらい実習準備と実習に対する自己評価の関係や就職意識について調査した。またこれとは別に保育士養成校の学生

に保育所の就職に対する意識について調査し、結果を集計した。今年度はこれら2点の調査結果を分析する。その結果をもとに保育所の安全教育を含めた実習教育について研究を深める。

I 実習中の安心・安全について

（1）ヒヤリハット・事故報告の集計と結果

研究者の所属する社会福祉法人至誠学舎立川の保育園では安全対策の一つとしてヒヤリハット（事故には至らなかったもののヒヤリとした、ハットとした事例）ならびに事故報告を実施している。「傷害を伴った災害を調べると、傷害は伴わないが類似した災害が多数発見されることがよくある。（中略）、同じ人間の起こした同じ種類の330件の災害のうち、300件は無傷で、29件は軽い傷害を伴い、1件は報告を要する重い傷害を伴っていることが判明した。」（H.W.ハインリッヒほか『ハインリッヒ産業災害防止論』これはハインリッヒ（Herbert William Heinrich 1886年～1962年）の法則として有名である。この法則は、「1：29：300の比は同一の人間に類似した災害が330回起きるとき、そのうち300回は傷害を伴わず、29回には軽い傷害が、1回には重い傷害が伴う」ことを示しているのだが、さらに「傷害を伴うにせよ伴わないにせよ、すべての災害の下には、おそらく数千に達すると思われるだけの不安全行動と不安全状態が存在する」ことも合わせて説明している。この比率は「災害防止に役立ち、対策をたてる機会を示すもの」と考えられている。

今回の研究では事故発生に関する特徴を把握する目的のために、研究者の4保育園の過去のヒヤリハット並びに事故事例を集計〔至誠4保育園のヒヤリ・事故集計表〕した。幸いにも集計した全園で1件も「重い傷害が伴うような災害（事故）は起こっていなかった。集計にあたっては、「傷害は単に災害の結果生じるにすぎない」ので、事故には至らなかったヒヤリハット事例と事故事例をそれぞれ一つの同じ件数として扱った。

ところで、ヒヤリハットはおおまかに通院までにいたらなかった事例ということで各園共通であったが、「嘔みつき」を集計するかしないかなど、ヒヤリハットの基準が保育園ごとに定められていたことが集計後に分かった。もともと基本的な考え方や書式は同じであったが、各園の事故を防止するための手段の一つであるため、ヒヤリハットの事例を扱っていくうちに各園の事情に合わせて工夫されたようだ。事例の内容については様々であったが、「災害には重いも軽いもない。あるのは重い傷害と軽い傷害である。」今回は内容については件数が限定されていることもあり一切分類等せずに、すべての事例を曜日と時間でまとめた。その結果、はっきりと園の違いや特徴が現れたが、あえて一つに集計しなおすこととした。各園の集計結果で傾向ははっきり分かったが、

設立年の関係などからヒヤリハット・事故事例件数が少ない園もあり、各園の比較に研究としての意味は薄いと思われた。また4園をまとめることで事例件数を多くし、より一般的な傾向を見ることのほうが今回の研究の目的に沿うと思われた。

曜日では、研究者たちは、それぞれの経験による印象から、週初めと週末の事故や怪我が多いと予想した。週明けは休み中の家族との外出など過ごし方によって、また週末は1週間通園して、それぞれ疲れによる子供たちの事故や怪我が多くなっていると推測されたが、集計では木曜日が一番多く、続いて金曜日、水曜日となっていた。月曜日も少なくはないが木曜日の約半分であった。これは研究者たちの印象とは違っており、集計することでの気づきがあった。全国保育園保健師看護師連絡会会員の「事故調査」アンケート（全国保育園保健師看護師連絡会2012年『保育のなかの事故 保健指導シリーズNo.8』）では、発生曜日は、月曜から金曜までほぼ同じ割合（月曜日17%、火曜日19%、水曜日18%、木曜日21%、金曜日21%）で発生していたので、比較すると集計した4園の特徴が表れていることが分かる。全国調査の発生時間は外遊びや活動量が多い9時～11時と16時に事故（けが）が多くなっていた。4園では10時台、11時台が一番多く、次に15時・16時・17時台となっており、こちらは全国的な特徴に似ている結果であった。

プログラムとプログラムの移動の時間や場面が変わるときに事故は発生しやすいと予想される。また午前中の散歩時の転倒による怪我や、給食時のアレルギー児への誤食、夕方の外遊び中の怪我などを思いつくが、今回の研究では、時間の都合もあり事故内容についての検討はしなかった。参考までに、全国調査（社会福祉法人全国社会福祉協議会全国保育協議会 平成24年9月『全国の保育所実態調査報告書2011』）のヒヤリ・ハット事例の状況を示すと、「事故・けがの対応」が65.8%で最も割合が高く、次いで「食物アレルギー除去食」が30.7%、「施設内の安全管理」が30.3%、「与薬の取扱い」が16.9%、「園外保育（散歩時など）の対応」が14.9%で続いている。

各園で事例ごとに検討していけば、時間や曜日だけでなく、怪我をしやすい子供や起こりやすい事故の内容なども把握できるであろう。しかし、今回のように集計し、表にするだけでも十分に傾向が把握できた。

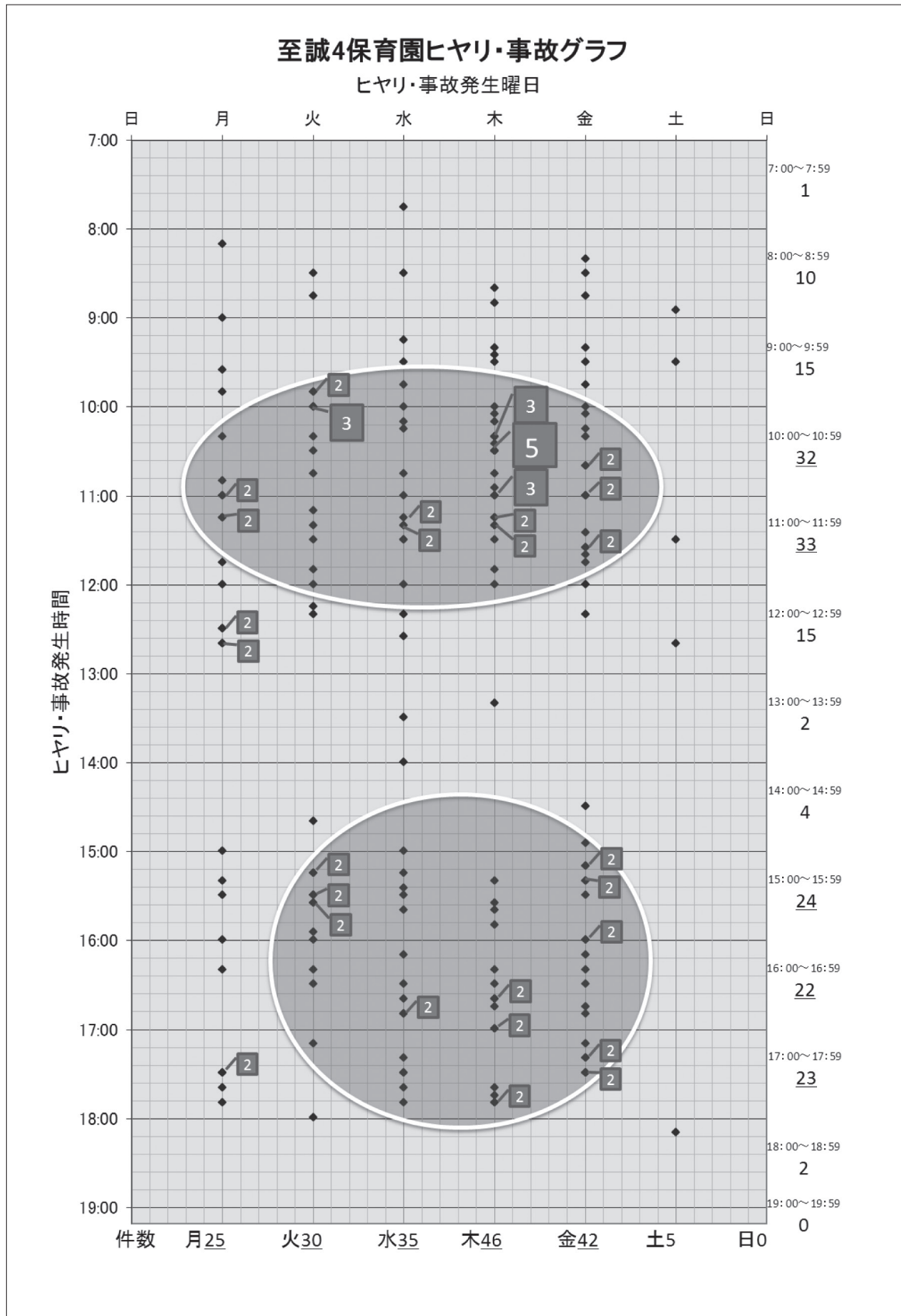
さらに、表をグラフ〔至誠4保育園ヒヤリ・事故グラフ〕にし、事故の件数を点で表した。視覚的な印象として気をつけなければいけない曜日と時間が一目でわかり、保育に当たる職員にも注意を喚起しやすい。また、実習生等を受け入れる際にはオリエンテーションなど実習前にグラフを見せることで、詳しい説明をすることなく、理解を促すことができると思われた。また、受け入れ側としては実習生の責任実習などの時間や曜日を安全という視点からのみ配慮すれば月曜日に設定するというこ

もできるであろう。子供の安全を守ると同時に、実習生を守ることにもつながると考える。子供を実習中に事故させてしまうようでは実習のあり方も問われることになる。「保育園における事故のリスクは、①子どもの持つリスク、②保育者の持つリスク、③施設・設備の持つリスクの3つに大きく分けられる。（中略）保育者の持つリスクとしては、子どもの特性の理解不足、リスクマネジメントの意識及び能力不足が考えられる。」（田中哲郎

2011年『保育園における事故防止と安全管理』（日本小児医事出版社）さらに田中は、事故の発生は、上記「3つのリスクがある一定以上になると保育園の事故発生頻度が高くなる」と考え、「個々の事故に関しては単一の要因だけでも発生するが、各々のリスクを低くする必要がある。」と述べている。自園のリスクを把握し、注意を喚起することで防げる事故もあるであろう。

〈至誠4保育園のヒヤリ・事故集計表〉

	時間	月	火	水	木	金	土	日	計
7	7:00～ 7:59	0	0	1	0	0	0	0	1 (0.5%)
8	8:00～ 8:59	1	2	1	2	3	1	0	10 (5.4%)
9	9:00～ 9:59	3	2	3	3	3	1	0	15 (8.1%)
10	10:00～10:59	2	6	4	14	6	0	0	32 (17.4%)
11	11:00～11:59	5	4	6	9	8	1	0	33 (18.0%)
12	12:00～12:59	5	3	3	1	2	1	0	15 (8.1%)
13	13:00～13:59	0	0	1	1	0	0	0	2 (1.0%)
14	14:00～14:59	0	1	1	0	2	0	0	4 (2.1%)
15	15:00～15:59	3	7	5	4	5	0	0	24 (13.1%)
16	16:00～16:59	2	3	5	6	6	0	0	22 (12.0%)
17	17:00～17:59	4	1	5	6	7	0	0	23 (12.5%)
18	18:00～18:59	0	1	0	0	0	1	0	2 (1.0%)
19	19:00～20:00	0	0	0	0	0	0	0	0 (0%)
	のべ数 (%)	25 (13.6)	30 (16.3)	35 (19.1)	46 (25.1)	42 (22.9)	5 (2.7)	0 (0)	183 (100%)
		月	火	水	木	金	土	日	



（2）ヒヤリング調査

安全対策等について参考とするため聞き取り調査を行った。質問事項は以下の通りである。

- ・どのような安全対策をしていますか。
- ・どのようにヒヤリハット並びに事故等の記録を活用していますか。また、どのようにそれらの記録を職員間

で共有していますか。

- ・安全対策、防災に関して、地域との連携はどのようにしていますか。
 - ・実習生に事前にオリエンテーション等で安全対策。事故防止のための指導をどのようにしていますか。
- ヒヤリング調査の回答を下の表にまとめた。

ヒヤリング調査回答					
	安全対策	ヒヤリハットとその活用	地域との連携	実習生	その他
島根T保育園	避難消火通報訓練。近隣の河川の氾濫を想定し、年3回訓練実施。	ヒヤリハットを活用し、年1回見直し、出来ない所をフォロー。今までに実習生のヒヤリハット体験はなかった。	消防団と一緒に訓練。	実習生受け入れのマニュアルで、実習生に説明。訓練等を実習に合わせて設定することはない。	地震が少ない地域。
東京J保育園	月1回の訓練実施。防犯カメラを園内に設置。	年1回ヒヤリハットの検討会を実施。園内研修でグループ発表会。	消防署へ勤労感謝の日に子どもたちと出向き、交流。	マニュアルで実習生へ説明。	今後、安全対策について検討予定。
東京M保育園				実習生はカリキュラムに沿って実習をしているので、カリキュラムをこなせばよい。	安全指導については就職してからやる。
東京T保育園	玄関の自動扉を職員が施錠管理。防犯カメラの設置。	ヒヤリハットは必要に応じて職員会議や、朝礼で報告し、非常勤職員にも回覧する。	自治会に防犯や、防災に関してお願いしている。	事前オリエンテーションで安全対策について伝えている。	
東京D保育園	学校110番、防犯カメラの設置。電子錠門扉。防災マニュアル(BCP)作成。園児用・職員用の防犯教室。	ヒヤリハットは朝礼や職員会議等で周知し、次年度の運営計画に載せて職員に配布。	AEDのある近隣マンションに借用することを確認。	事前オリエンテーションで事故防止の説明等を特に指示していない。	「ピーボ君の家(緊急避難の家)」。

今回は5園の聞き取り調査ができた。時間的な制約で十分な聞き取りができなかった反省はあったが、実習生に対しての安全教育の必要性を今後も検討していくべきであるとの印象を持った。研究報告者の園も含めて実習生への安全教育について意識が薄い園があったことは課題であろう。

ところで、今回聞き取り調査を依頼した島根県のT保育園は音楽療法を取り入れていた。音楽療法は体の機能維持改善、行動変容するために音楽を使う。音楽は情緒の安定も期待できる。「子どもの事故は発達と密接な関連があることが明らかにされている。(中略)子どもの

発達過程をよく理解し、それに沿って的確な対応をすることにより大部分の事故は防止可能と考えられる。」と田中は述べている。研究者の所属する法人の保育園ではモンテッソーリ教育法を取り入れている。モンテッソーリ教育法の活動は大きな体の運動や手先の運動を多く取り入れており、体の調整を含めた心身の発達を促すことを目的の一つとしている。聞き取り調査を終えて、体の調整、心の安定が事故防止にどのように役立っているか、園の特色としている活動との関連で調査を深めることもできると感想を持った。

（3）安全に関する実習教育

4園の集計では実習生の関係するヒヤリハット事例は1件だけであった。石川他の研究では、保育場面で発生するヒヤリハット体験について保育士197名に質問紙調査を依頼し、保育実習生の保育についてヒヤリハット体験を目撃したことがあるのは66.0%であった。（石川他『保育士のヒヤリハット体験』）石橋他は、車への飛び出しや、保育士と子どもの衝突、保育士の目から見た死角の存在、食物アレルギーなどの観点については、養成校

のみならず、特に「現場での事前指導が必要なケース」と述べている。さらに実習では、事後の振り返りや反省会を通して、「保育士から注意を受けることや学生相互に情報を共有することを通して、気づきを促し、危険感受性やヒヤリハット認知力を付けていくような事後指導のあり方が求められる。」と述べている。

実習生自身の学びを整理するための以下のような書式を作り、実習生に試験的に記入してもらった。安全に関する実習教育は今後さらに研究を続ける予定である。

安全に関する実習教育						
項目・ヒヤリハット		大学での学習・事前学習	保育所実習Ⅰ、Ⅱ			大学でのふりかえり、巡回指導保育所からの実習評価
			オリエンテーション実習計画	実習内容	反省会SV	
健康・疾病	家庭との連絡 ・家庭から ・保育園から 保育のプログラム 保育中の変化への対応 家庭の不適切な養育					
	時間・一日の流れ 場所 プログラム 職員の体制 環境整備 ・遊具、備品、教材 ・建物・設備 食（調理、食事、感染予防） 衛生					
安全・事故						
災害	自衛消防組織 災害訓練・子どもたちへの安全教育					

Ⅱ．認可保育所保育士アンケートの考察

平成23年度のアンケート調査「～保育実習体験が保育所保育士としての就職意欲に与える影響～」は、保育所保育士に学生時代を振り返って保育実習に関する質問をした。実習の準備をよくした学生は実習の自己評価が高く、就職意欲に結びついているという先行研究とほぼ同じような結果が確認され、保育士養成校時代のよい実習体験が保育所への就職意欲に結びついていることが示唆された。就職について、学生時代に保育所保育士になるという気持ちの変化を問う項目では、最後の実習でより強く就職を意識していた。実習を就職につなげるため、昨年度のアンケートをさらに分析し、保育所として実習生にどのような指導をするか、養成校として実習を受けるための事前・事後どのような学習が必要か、今回は特に安全面に視点を置いて研究した。なお再掲となるかもしれないが、詳しい分析をするにあたり研究の概要を以

下に記す。

（1）研究の背景又は動機

全国社会福祉協議会の調査によると、「採用に困難を感じている法人が80.4%」であった。（全国社会福祉協議会社会福祉制度・予算対策委員会 施設部会『社会福祉施設の人材確保・育成に関する調査 報告書』平成20年7月）地域的には、「首都圏」の採用困難度が比較的高くなっている。採用・確保が困難な職種をみると「保育職」は「看護職（看護師・保健師等）」や「介護職（高齢領域）」に比べれば割合が高くないが、職員の集めづらさがあるのは研究者の所属する法人でもこの数年感じている。報告書の提言の一つには「人材の新規獲得のために」「学校・養成校への周知、関係作り」として、「実習の積極的な受け入れ、行事、研修をおこなう際の呼びかけ」がある。研究者の各保育園では、大学や短期大学等の保育士養成校から実習生を受け入れている。実

習指導教官などから実習を機に一般職へ進路希望を転換してしまう学生もいると聞いた。別の意識調査報告書によれば、「実習後に社会福祉（保育）の職場に勤めたいと思った学生は60.9%であった。学校で学んだことで、社会福祉（保育）の職場に勤めたいと思った学生の81%よりも減少している。」（社会福祉法人静岡県社会福祉協議会静岡県社会福祉人材センターの『平成20年度 静岡県社会福祉系大学・短大・専門学校生に対する就労に関する意識調査 報告書』平成21年3月）学生が実習を経験して自らの適性を見極め進路変更することは仕方がないが、できれば資格を取るだけでなく保育園に就職し実習の学びを活かし保育所保育士として活躍されることを期待したいというのが研究者の本音である。各保育所にとってはよい保育士を確保することは、質の高い保育を提供するための必須条件である。学生には保育士になるという自身の夢を叶えてもらいたいと願う。

（2）アンケート調査の目的・方法

保育実習体験が保育所保育士としての就職意欲に与える影響をアンケート調査するに当たり、数量的な分析で実習での充実感が就職につながっていることを確認し、自由記述による質的分析で保育士になろうと思ったきっかけ等を検討する。実習で受け入れる学生を保育所就職へとつなげるための調査と位置付けた。これにより実習生への指導や実習内容を適確にでき、養成機関へは実習前後の指導に対する提言や要望ができると考えた。

森田他によれば、実習前の準備をよくした学生は実習で充実感を味わい、さらに就職希望へとつながっていた。そこで当法人の8つの保育園2つの分園に在職している保育士にアンケート調査を実施した。学生時代の実習について思い出してもらうために入職3年目までの職員とし、アンケートは留め置きで各自が書いたものを後日回収した。多忙な職員に配慮するため20分ほどで回答できる内容としたが、人によっては若干長くなってしまったようであった。

（3）アンケート調査結果

今回のアンケート調査を行うにあたり森田他の研究

「教育実習体験が幼稚園教員としての就職意欲に与える影響」を参考にした。森田他は教育実習を行った学生を対象にアンケートで 部分実習と全日実習に対する自己評価に加えて、教育実習Ⅱに対する総合自己評価を尋ねている。分析結果として、部分実習と全日実習それぞれについての評価よりも、教育実習Ⅱの3週間をやり遂げたことが、教育実習Ⅱに対する総合自己評価の充実感につながったと考え、考察で「教育実習Ⅱをやり終えた学生は、幼稚園教員への就職希望を強めたと言える。教育実習はⅠとⅡを合わせて4週間の経験である。この期間中、学生が責任を持って行う場面があるものの、学級担任が側にいることから、実習生は物理的にも心理的にも守られた環境下の中で過ごすといえる。他方、就職した場合には教育実習のように期間が決まっているわけではなく、自分が学級経営をしていくという点で責任の大きさは教育実習のそれとは比較にならない。しかし、教育実習Ⅱを頑張れたという経験があるからこそ、学生は、「就職してからもうやっていける」という自己効力感を持つことが出来たと考えられる。」とまとめている。

このことを逆説的に考えるならば、現在すでに就職している保育士は充実した実習を行ったと推測できた。以下にアンケートの結果をまとめた。

ア. アンケート概要

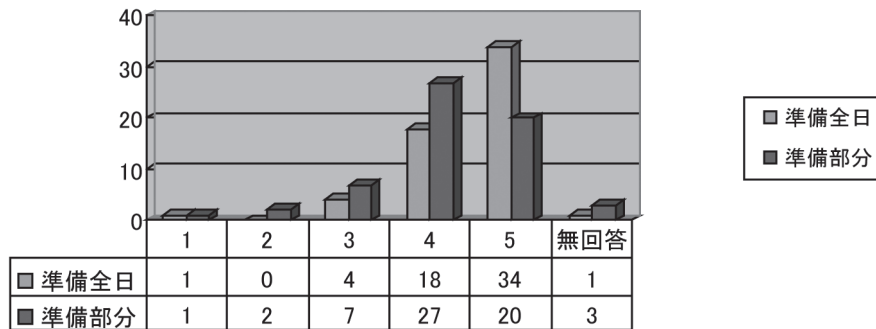
保育実習に関するアンケートを平成23年7月～8月に実施した。対象は研究者の所属する社会福祉法人至誠学舎立川保育事業部の認可保育園8箇所と分園2箇所の入職3年目までの保育士60名で回収率は100%であった。

回収した60名分の結果から、無回答のあった項目も含めて60名分を数量的分析対象とした。（調査項目については巻末資料参照）

部分実習よりも全日実習の方がよく準備をしていることが分かる。全日実習の準備を「かなりした」人が34名で全体の56.7%と割合が一番多い。部分実習の準備は「わりにした」人が29名で全体の48.3%と割合が一番多い。

実習のために必要な教材研究、指導案の作成など準備はしましたか。

		全日実習		部分実習	
		回答数	構成比	回答数	構成比
1	ぜんぜんしなかった	1	1.7%	1	1.7%
2	あまりしなかった	0	0.0%	2	3.3%
3	どちらかといえばした	4	6.7%	7	11.7%
4	わりにした	18	30.0%	29	48.3%
5	かなりした	34	56.7%	20	33.3%
無回答		3	5.0%	1	1.7%
計		60	100.0%	60	100.0%



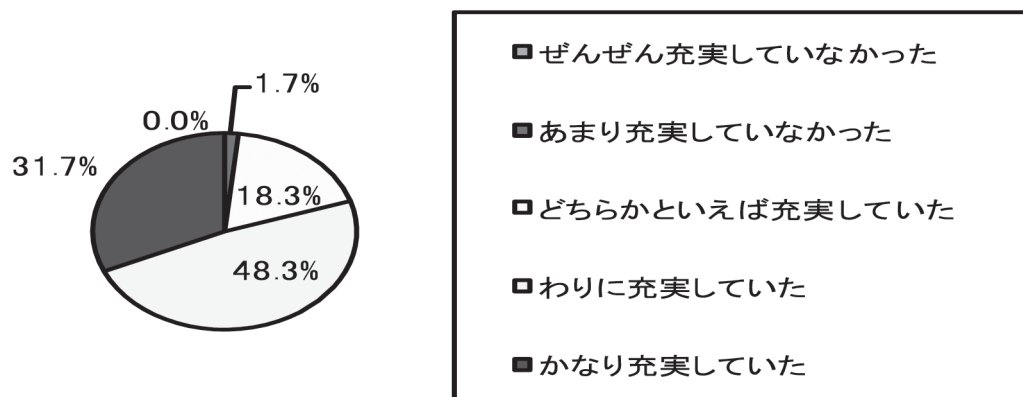
保育実習全般に対する総合自己評価は29人が「わりに充実していた」と答え、「どちらかといえば充実してい

た」11名と、「かなり充実していた」19名の合計98.3%であった。

保育実習全般に対する総合自己評価

		回答数	構成比
1	ぜんぜん充実していなかった	0	0.0%
2	あまり充実していなかった	1	1.7%
3	どちらかといえば充実していた	11	18.3%
4	わりに充実していた	29	48.3%
5	かなり充実していた	19	31.7%
計		60	100.0%

保育実習全般に対する総合自己評価



イ. 実習の経験と保育所への就職希望の関係について

就職について、学生時代、保育所保育士になるという気持ちの変化を問う項目では入学時の平均3.26から最初の実習後に3.16と一時的に減るものの最後の実習後に3.56と増えている。これは「かなり思った」人の変化入学時18名→初実習後12名→最終実習後23名と似たような増減である。「どちらかといえば思った」人の変化11名→15名→6名や、「あまり思わなかった」人の変化

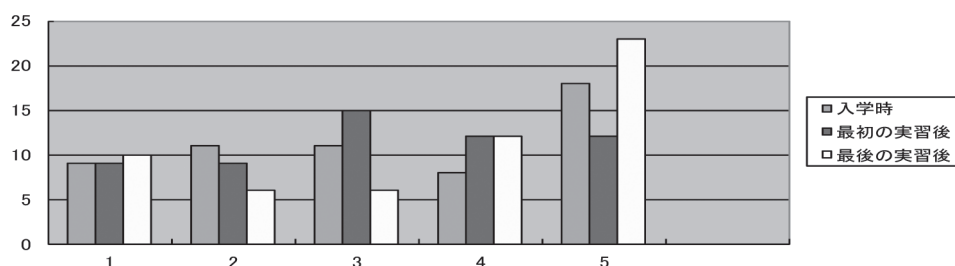
11名→9名→6名から、初めての実習で就職について少し気持ちが揺らぐ人もいれば、実習を経験して就職を意識しだす人もいることが推測され、最後の実習でより強く就職を意識することになったのだろう。

数量的質問である項目の平均値と標準偏差を以下に示した。

	準備		自己評価	就職希望		
	全日	部分	総合	入学時	初実習後	最終実習後
平均	4.47	4.11	4.09	3.26	3.16	3.56
標準偏差	0.77	0.87	0.73	1.47	1.35	1.52

就職について学生時代、保育所保育士になるという気持ちに変化はありましたか。

		入学時		最初の実習を終えて		最後の実習を終えて	
		回答数	構成比	回答数	構成比	回答数	構成比
1	ぜんぜん思わなかった	9	15.0%	9	15.0%	10	16.7%
2	あまり思わなかった	11	18.3%	9	15.0%	6	10.0%
3	どちらかといえば思った	12	20.0%	15	25.0%	6	10.0%
4	わりに思った	10	16.7%	15	25.0%	14	23.3%
5	かなり思った	18	30.0%	12	20.0%	24	40.0%
計		60	100.0%	60	100.0%	60	100.0%



ウ. アンケート分析

実習の準備について平均値は全日4.25、部分4.03である。有意差は見られなかったが、どちらも高い数値と言

える。以下、アンケート調査の集計結果と、自由記述の中で関連するものがあったので以下に記した。

（全日実習）そのために必要な教材研究、指導案の作成などの準備はしましたか

部分実習

保育実習全般に対する総合自己評価

得点 (範囲)	度数 (f)	簡約数 (X)	(fx)	(fx ²)	得点 (範囲)	度数 (f)	簡約数 (X)	(fx)	(fx ²)	得点 (範囲)	度数 (f)	簡約数 (X)	(fx)	(fx ²)
1	1	-2	-2	4	1	1	-2	-2	4	1	0	-2	0	0
2	0	-1	0	0	2	2	-1	-2	2	2	1	-1	-1	1
3	4	0	0	0	3	7	0	0	0	3	11	0	0	0
4	18	1	18	18	4	29	1	29	29	4	29	1	29	29
5	34	2	68	136	5	20	2	40	80	5	19	2	38	76
無回答	3	3	9	27	無回答	1	3	3	9	無回答	0	3	0	0
N	60	$\sum fx \rightarrow \sum X$	84		N	60	$\sum fx \rightarrow \sum X$	65	115	N	60	$\sum fx \rightarrow \sum X$	66	106
		$\sum f$	57				$\sum f$	59				$\sum f$	60	
M	算術平均	$\sum X/N$	4.4		M	算術平均	$\sum X/N$	4.08		M	算術平均	$\sum X/N$	4.1	
SD ²	分散	$\sum (X-M)^2/N$	0.67		SD ²	分散	$\sum (X-M)^2/N$	0.74		SD ²	分散	$\sum (X-M)^2/N$	0.56	
SD	標準偏差	$\sqrt{SD^2}$	0.82		SD	標準偏差	$\sqrt{SD^2}$	0.86		SD	標準偏差	$\sqrt{SD^2}$	0.75	

t-検定：一対の標本による平均の検定ツール		
実習の準備について	全日実習	部分実習
平均	4.25	4.033
分散	1.547	1.016
観測数	60	60
ピアソン相関	0.534	
仮説平均との差異	0	
自由度	59	
T	1.517	
P(T<=t) 片側	0.067	
T 境界値 片側	1.671	
P(T<=t) 両側	0.135	
T 境界値 両側	2.001	
有意差はない	0.135	p > 0.1

「実習では、やはり“準備をおこたらないこと”が一番だと思います。準備にやりすぎはないと思います。また、準備をすることで、気持作りにも役立ちます。実習が始まったら、積極的に動けると良いと思います。指示されたことだけではなく、手が空いたら自分から「なにかできること（すること）はありますか？」と聞いて、色々な仕事に触れられると良いです。頑張ってください。」

「就職したときに思ったことは実習の大事さ。そのときにできる限りの準備をして実習に取り組んで下さい。実習で成功したこと、失敗したことなど今後、就職したときに役に立つと思います。」

「実習は本当に自分の良い学びとなり、財産となるものです。たくさん何かを吸収できるよう、事前に勉強し、

準備をして、その時十分に力を発揮できるようにして頂いてください。本当に良く、目の前の子どもを見て、感じ、考えることがいつか役に立つと思います。」

（「現在通っている後輩に実習や就職について一言アドバイス」記述回答より）

就職について保育士になるという気持ちの平均をみると入学時3.28と最後の実習後3.60だが、t検定ではどちらもp>0.1で有意差はなかった。入学時3.28と最初の実習後3.20も、同様に有意差はなかった。ところが最初の実習後と最後の実習後では有意水準1%で有意差があった。この意味するところが何なのであろうか？最初の実習で保育士の仕事を経験し就職について考えるところがあつたものの、学習や研鑽を重ねて最後の実習では当初の気持ちを思い返すことができたかと推測した。

就職について 学生時代、保育所保育士になるという気持ちに変化はありましたか			
	入学時	最初の実習後	最後の実習後
平均	3.283	3.200	3.600
分散	2.105	1.790	2.278
観測数	60	60	60

C 1 入学時					C 2 最初の実習を終えて					C 3 最後の実習を終えて				
得点 (範囲)	度数 (f)	簡約数 (X)	(fx)	(fx ²)	得点 (範囲)	度数 (f)	簡約数 (X)	(fx)	(fx ²)	得点 (範囲)	度数 (f)	簡約数 (X)	(fx)	(fx ²)
1	9	-2	-18	36	1	9	-2	-18	4	1	10	-2	-20	40
2	11	-1	-11	11	2	9	-1	-9	2	2	6	-1	-6	6
3	12	0	0	0	3	15	0	0	0	3	6	0	0	0
4	10	1	10	10	4	15	1	15	29	4	14	1	14	14
5	18	2	36	72	5	12	2	24	80	5	24	2	48	96
	60	$\Sigma fx \rightarrow \Sigma X$	17	129		60	$\Sigma fx \rightarrow \Sigma X$	12	115		60	$\Sigma fx \rightarrow \Sigma X$	36	156
N		Σf	60		N		Σf	60		N		Σf	60	
M	算術平均	$\Sigma X/N$	3.28		M	算術平均	$\Sigma X/N$	3.2		M	算術平均	$\Sigma X/N$	3.6	
SD ²	分散	$\Sigma (X-M)^2/N$	2.07		SD ²	分散	$\Sigma (X-M)^2/N$	1.76		SD ²	分散	$\Sigma (X-M)^2/N$	2.24	
SD	標準偏差	$\sqrt{SD^2}$	1.44		SD	標準偏差	$\sqrt{SD^2}$	1.33		SD	標準偏差	$\sqrt{SD^2}$	1.5	

t-検定：一対の標本による平均の検定ツール		
	就職について 学生時代、保育所保育士になるという 気持ちに変化はありましたか	
	最初の実習後	最後の実習後
平均	3.200	3.600
分散	1.790	2.278
観測数	60	60
ピアソン相関	0.737	
仮説平均との差異	0.000	
自由度	59.000	
T	-2.966	
P(T<=t) 片側	0.002	
T 境界値 片側	1.671	
P(T<=t) 両側	0.004	
T 境界値 両側	2.001	
有意差がある	2.966	>2.001
有意水準 1 % で有意差がある	0.004	p < 0.01

「大学4年生の10月に、私になりたかった職業は保育士であるということを思いだし、保育所保育士になろうと思いました。実際の実習では私の思っていた保育士像と現実に差があり、戸惑い保育士になるのを諦めた時もありました。今は、子どもの気持ちに寄り添うことができる社会福祉法人至誠学舎に就職でき、幸せに思います。」
 (「保育所保育士になろうと思ったきっかけ等」回答記述より)

エ. 自由記述部の回答

自由記述の回答については適切なデータ解析法がみつけれなかったが、保育所保育士になろうと思ったきっかけ等について注目してまとめてみた。60人中59人の回答があり、その中から複数回答で分類した。傾向としては「仕事と子育てとの両立への支援に興味があった」－1人や「子どもの成長を守りたい・手助けしたい・成長を見たい」－8人のような保護者や子どもへの援助よりも、「小さいときから子どもが好きだった」－18人、「子どもと交流できる・遊ぶのが好きだった」－7人、「小

さいときから保育士にあこがれていた」－7人や、「子どもと長く居られる」－3人、「自分も成長できる」－2人など、自分自身の興味や憧れなどがきっかけとなっていることが分かる。

「何時ごろ決めたか」について、26人の記述があった。保育園／幼稚園－8人、小学校－2人、中学校－3人、高校－3人、大学－10人と、保育園や幼稚園の頃からの憧れや夢、もしくは大学になってから決定している人が目立つ。

自身が小さい頃に世話になった保育士や先生に憧れる、あるいは母親が保育士だったほか、「決定体験」の内訳では、実習－4人、ボランティア－3人、見学－2人、アルバイト－1人となっている。

いくつかの自由記述の質問項目の中で対になっている項目の回答数に注目した。「実習で指導して下さった先生から褒められたことを教えてください」が「実習で指導して下さった先生から注意されたことを教えてください。」よりも回答数が多いのは「子どもへのことば掛け」と「子どもとの遊び」であり、「子どもへの指示の仕方」は逆であった。そのことは、次の「実習で配属されたクラスの子どもからの反応について、うれしかったことを教えてください。」と「実習で配属されたクラスの子どもからの反応について、後悔したことを教えてください。」についても同様であった。「子どもへのことば掛け」と「子どもとの遊び」はうれしかったことが多く回答され、「子どもへの指示の仕方」のみが後悔したことが多く回答されていた。

対になっている自由記述の項目の中で印象として「実習中の子どもからの働きかけ」に対してうれしかったと回答している人が多かった。また、それは指導している先生から褒められたことでも同様であった。

（4）アンケート調査のまとめ

今回の調査を踏まえて実習のあり方を考える必要がある。注目すべきは最初の実習と最後の実習の就職意欲に対する差であった。最後の実習では入学時の保育所に就職したいという気持ちに自分を奮い立たせるのは何か。このあたりを意識して実習生を迎え入れることが大事になる。

前回の発表では、実習劇場とでもいうべき、意図的に印象に残るような体験をさせる活動を実習に組み入れていくことを提案した。例えば自由遊びの場面で鬼ごっこの鬼役を実習生にさせるなど、実習生の適正を見極めた上で実習生が中心的役割になるように指導する保育士が指示する。指導する保育士は実習生の子どもと遊ぶ姿を好意的に受け止め褒めることを意識して指導する。子どもからの関わりが多く出るような保育園の雰囲気づくりや実習時期、指導する保育士の選定なども気かけたい。

養成校には、実習生が実習を肯定的に捉えることができるように事前学習などの準備をよくすることを提案したい。これについては先に記述した書式などで今後確認し、関係機関に何を周知したらよいか、関係機関都の合同研究をもつなどして探っていくことができると考える。

Ⅲ 保育士養成校学生アンケートの考察

前年度のアンケートで、養成校の学生に、保育士志望動機や実習・ボランティア経験等の質問項目に回答してもらった。これらの結果をさらに分析、考察し、学生が安心して就職したいと思う職場としての認可保育所と、働きたいと思う保育士としての在り方を探った。

（1）はじめに

昨年度に実施した「保育園での就職に関する意識調査アンケート（学生対象）」の分析を進め、保育士養成校に所属し、保育士を志望する学生は、その就業志向別に、どのような職場環境や就業条件をのぞむのかを探った。

（2）使用するデータ

分析データは、「保育園での就職に関する意識調査アンケート（学生対象）」を用いる。調査は、2011年12月～2012年1月に、四年制の女子大学（2校）の2～4年生の学生を対象に行われた。有効回答数は、216票である。

このうち、「あなたはいつまで働きたいと思っていますか？」の質問項目は、

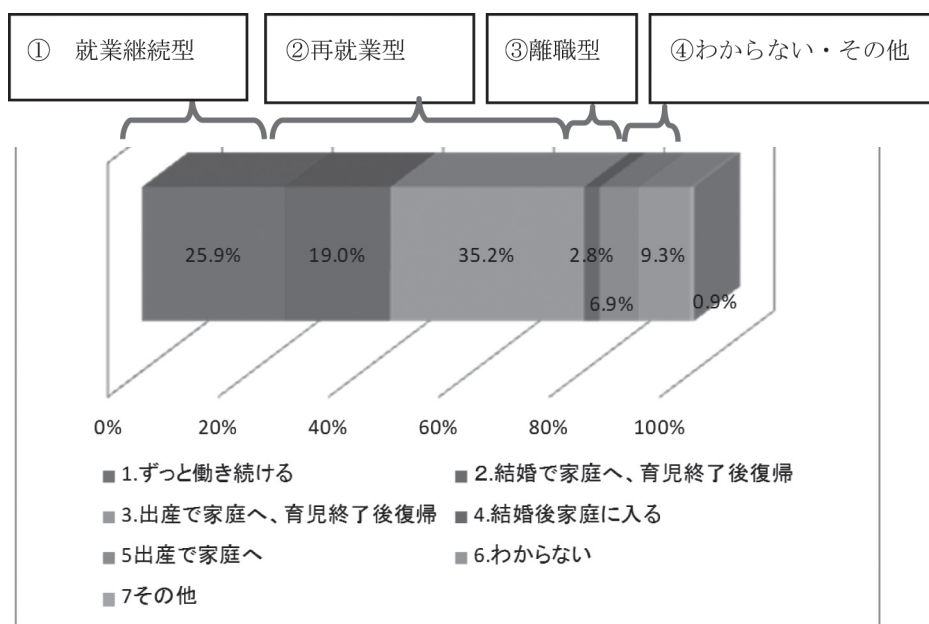
1. ずっと働き続ける（25.9%） 2. 結婚で家庭に入り、育児終了後働く（19.0%） 3. 出産・育児で家庭に入り、育児終了後働く（35.2%） 4. 結婚後、家庭に入る（2.8%） 5. 出産・育児で家庭に入る（6.9%） 6. わからない（9.3%） 7. その他（0.9%）となっていた。これらをさらにグループ別に分け、1は働き続けるので、①「就業継続型」（25.9%）、2～3を一度仕事を辞めてから再度働く②「再就職型」（54.2%）、4・5は仕事を辞めてそのまま職を離れる③「離職型」（9.7%）、それ以外を④「わからない・その他」とした。

（3）分析方法と結果

各質問項目でクロス表分析を行い、就業志向グループごとに違いがみられるのかを検証した。その結果は、次のとおりである。

ア. 経営母体別

経営母体別（1. 公立保育園、2. 公立に準じる民間委託の保育園、3. 社会福祉法人の保育園、4. 株式会社立の保育園、5. その他の民間保育園）を見たところ、いずれも有意な結果を得られなかった。



就業志向パターン別にみた働き方の希望について
 (「保育園での就職に関する意識調査アンケート(学生対象)」の分析から)

イ. 経営母体を選んだ理由(3つまで)

ア. の経営母体を選んだ理由では、質問紙には次の選択項目がある。

1. 長く勤められるから
2. 給料がよいから
3. 定期的に昇給するから
4. 就業条件(勤務時間等)がよいから
5. 大手で安心できるから
6. 研修制度が整っているから
7. 育児

8. 知名度があるから
9. その他

このうち、有意な結果が得られたのは、「1. 長く勤められるから」である(5%有意)。当然ではあるが、就業継続型のグループは、長く勤められる(と考えられる)経営母体を志向している。また予想に反し、「7. 育児支援制度」は有意ではなかった。

表1 「1. 長く勤められるから」のクロス表結果

		1. 長く勤められる		合計
		はい	いいえ	
就業継続型	度数	31	26	57
	%	54.4%	45.6%	100.0%
再就職型	度数	45	70	115
	%	39.1%	60.9%	100.0%
離職型	度数	3	18	21
	%	14.3%	85.7%	100.0%
わからない・その他	度数	4	18	22
	%	18.2%	81.8%	100.0%
合計	度数	83	132	215
	%	38.6%	61.4%	100.0%

ウ．就職の際には、何を重視するか

「就職の際に何を重視するか」（複数回答可）の選択項目は、以下の通りである。

1. 保育内容 2. 経営方針 3. 勤務時間 4. 残業の有無 5. 給料・手当などの収入 6. 雇用形態（正職員か臨時職等か）
7. 育児支援制度の充実 8. 研修制度 9. 立地条件（家から近いなど） 10. その他

そのうち、「7. 育児支援制度の充実」、「9. 立地条件（家から近いなど）」で有意な結果が得られた。

「7. 育児支援制度の充実」では、就業継続型が「はい」

と答えている割合が高いのに対し、「再就職型」「離職型」は低くなっている。仕事を続けていきたいと思う学生にとっては、育児支援制度の充実をかなり重視していることがわかる。

それに対し、「9. 立地条件（家から近いなど）」では、就業継続型はあまり高い割合ではなく、離職型が最も高く、次に再就職型が高い結果となっている。仕事を続けたいと考える学生は立地条件はそれほど重視しておらず、それよりも仕事を続けていくための諸条件（育児支援制度など）をより重視していると考えられる。

表２—１ 「7. 育児支援制度の充実」のクロス表結果

		7. 育児支援制度		合計
		はい	いいえ	
就業継続型	度数	14	43	57
	%	24.6%	75.4%	100.0%
再就職型	度数	14	101	115
	%	12.2%	87.8%	100.0%
離職型	度数	0	21	21
	%	0.0%	100.0%	100.0%
わからない・その他	度数	3	19	22
	%	13.6%	86.4%	100.0%
合計	度数	31	184	215
	%	14.4%	85.6%	100.0%

表２—２ 「9. 立地条件（家から近いなど）」のクロス表結果

		9. 立地条件		合計
		はい	いいえ	
就業継続型	度数	8	49	57
	%	14.0%	86.0%	100.0%
再就職型	度数	26	89	115
	%	22.6%	77.4%	100.0%
離職型	度数	6	15	21
	%	28.6%	71.4%	100.0%
わからない・その他	度数	9	13	22
	%	40.9%	59.1%	100.0%
合計	度数	49	166	215
	%	22.8%	77.2%	100.0%

オ．四年制大学で保育士免許を取得するメリット

「就職の際に、四年制大学で保育士免許を取得するメリットは何だと思いますか？」の選択項目は、以下のとおりである。

1. 保育の専門性をより高められる
2. 専門以外の幅広い知識を身につけられる
3. 実習や現場体験などで保育技能がしっかりと身につけられる
4. 幼稚園教諭など他の資格も多く取得できる
5. その他

このうち、「2. 幅広い知識」と「3. 保育技能が身につけられる」で有意な結果が得られた。

「2. 幅広い知識」では、就業継続型の学生が高い割合でみられる。また「3. 保育技能が身につけられる」は離職型や再就職型が高い割合でみられる。大学四年間の学びで、就業継続型は保育以外の知識も身につけて働いていこうと考えているのに対し、離職型・再就職型はまずは現場で通用する保育技能を身につけるために4年間の長期で学ぼうとしているととらえることができる。

表3—1 「2. 幅広い知識」のクロス表結果

		2. 幅広い知識		合計
		はい	いいえ	
就業継続型	度数	32	25	57
	%	56.1%	43.9%	100.0%
再就職型	度数	50	65	115
	%	43.5%	56.5%	100.0%
離職型	度数	11	10	21
	%	52.4%	47.6%	100.0%
わからない・その他	度数	17	5	22
	%	77.3%	22.7%	100.0%
合計	度数	110	105	215
	%	51.2%	48.8%	100.0%

表3—2 「3. 保育技能が身につけられる」のクロス表結果

		6. 保育技能がしっかりと		合計
		はい	いいえ	
就業継続型	度数	18	39	57
	%	31.6%	68.4%	100.0%
再就職型	度数	62	53	115
	%	53.9%	46.1%	100.0%
離職型	度数	12	9	21
	%	57.1%	42.9%	100.0%
わからない・その他	度数	6	16	22
	%	27.3%	72.7%	100.0%
合計	度数	98	117	215
	%	45.6%	54.4%	100.0%

カ. その他

就業志向型のグループごとに、はじめから保育士になりたい気持ち、また保育士資格を取得したい気持ちにグループごとの違いがあれば、それによって働く環境・条件の志向も違うと考え、「保育士になりたい気持ちはどのくらいですか?」、「保育士資格を取得したい気持ちはどのくらいですか?」についての質問項目についても分析を行った。その結果、どちらの質問項目も有意な結果は得られなかった。就業志向のグループによる意欲に関する違いはない。

（4）まとめ

学生の就業志向別に、①「就業継続型」、②「再就職型」、③「離職型」④「わからない・その他」に分け、クロス表分析を行った。「長く勤められるから」が就業継続型の割合が高く、有意であった。また、「就職の際には、何を重視するか」の質問に対し、「育児支援制度の充実」、「立地条件（家から近いなど）」が有意な結果となり、「四年制大学で保育士免許を取得するメリット」の質問で「幅広い知識」、「保育技能が身につけられる」が有意な結果が得られた。

「就職の際には、何を重視するか」の質問に対する「育児支援制度の充実」の回答は、就業継続型が重視する割合が高くなっているのに対し、「再就職型」「離職型」はそれほどではない。仕事を続けていきたいと思う学生にとっては、育児支援制度の充実をかなり重視していることがわかる。それに対し、「立地条件（家から近いなど）」では、離職型が最も高く、次に再就職型が高い結果となっている。仕事を続けたいと考える学生は立地条件をそれほど重視しておらず、それよりも仕事を続けていくための諸条件（育児支援制度など）をより重視していると考えられる。離職型や再就職型は、仕事を続けていくことよりも家庭生活を重視するためか、または就職条件をあまり視野に入れず、立地条件を重視して選んでいると考えられる。

また「四年制大学で保育士免許を取得するメリット」の質問で「幅広い知識」、「保育技能が身につけられる」が有意な結果であったが、就業継続型が「幅広い知識」、離職型・再就職型が「保育技能が身につけられる」を重視していることがわかった。

学生が将来に就職する上でどのような働き方を希望しているのかについての調査結果であるので、その後、実際に就職してから希望する条件とは異なるかもしれない。しかしながら、学生がこれからの就職を考える上でどのようなことを重視しているのか、保育園側が学生がどのような職場を求めているのかを知る上での結果が得られたと思われる。

おわりに

学生のアンケートでは4人に一人が「ずっと働き続ける」と答えた。この数字からは、結構多いという印象を受ける。一方、結婚で辞めたい人もいる。これは将来設計の差であるが、研究者の所属する法人では採用試験前に必ず見学をするように勧めている。自園の方針や雰囲気や職員の様子などを確認し、本当に自分が就職をしたい場所であるのか、学生に選んでもらう。その上で採用試験を受けて自法人に必要な人材であるかを確認させてもらっている。4年制大学、短期大学、専門学校の卒業生で、自法人で働くのに十分な資質のある人を採用している。実習や見学などで、どういう人材を求めているか、園の安全対策はどうなっているかなど、将来の成長の道しるべを明示することが、学生の就職に対する不安を軽減することになる。

「就職に不安を抱える保育士が臆病なのか、不安を解消できない保育園側の努力が足りないのか。」（福祉新聞 2012年11月12日【特集】福祉人材〜どう確保し、育てるか）理由は様々だが、働くことに不安を感じている学生がいることを理解した上で就職につながるような工夫を続けていく。今回は安全を中心に研究したが、実習中に安全を指導するという意識が少なかったことを研究者自身反省している。大沢他はその研究で学生からの実習後のアンケート調査を行い、「実習事前訪問打ち合わせや実習最初の頃、施設側からの安全配慮や安全管理、安全指導についての説明は「ない」という回答が60%から70%近くあり、「ある」という回答が少ない。」ことを指摘している（大沢陽子 杉澤朋美『幼稚園・保育園における安全指導と安全管理〜実習施設の実習生に対する事故防止・安全についての説明〜』）。今後は学生の安心につながるように、今回の研究を活かしていきたい。学生が実習を通じて保育園への就職意欲が高まるような保育を日々実践していこうと思う。

引用・参考文献

- 全国保育園保健師看護師連絡会2012年『保育のなかの事故 保健指導シリーズNo.8』
- 社会福祉法人全国社会福祉協議会全国保育協議会 2012年9月『全国の保育所実態調査報告書2011』
- 田中哲郎2011年『保育園における事故防止と安全管理』日本小児医事出版社
- 全国社会福祉協議会社会福祉制度・予算対策委員会 施設部会 2008年7月『社会福祉施設の人材確保・育成に関する調査 報告書』社会福祉施設の人材確保・育成に関する調査報告書
- 森田満理子 藤枝静暁 2010年9月「教育実習体験が幼稚園教員としての就職意欲に与える影響」
- 森田満理子 藤枝静暁 2011年9月「幼稚園教育実習体験による学生の意識変容に関する縦断的研究 効果的な教育実習指導方法の探索」
- 福祉新聞 2012年11月12日【特集】福祉人材〜どう確保し、育てるか

住田幸次郎1988年『初歩の心理教育統計法』ナカニシヤ出版、(福)
静岡県社会福祉協議会 静岡県社会福祉人材センター「福祉人材確
保ネットワーク」研究委員会『福祉サービスにおける 人材の確保
と定着に関する提言』
社会福祉法人静岡県社会福祉協議会静岡県社会福祉人材センター
2009年3月『平成20年度 静岡県社会福祉系大学・短大・専門学
校生に対する就労に関する意識調査 報告書』
全国保育士養成協議会『保育士養成資料集』第52号「指定保育士
養成施設卒業生の卒後の動向及び業務の実態に関する調査」報告
書Ⅱ、2010
平成22年度児童関連サービス調査研究等事業報告書 主任研究者
増田まゆみ 2011年3月『保育所実習指導と保育士のキャリアア

ップ～保育所と養成校の協働による実習指導ガイドラインの作成
～』財団法人こども未来財団
大沢陽子 杉澤朋美『幼稚園・保育園における安全指導と安全管
理～実習施設の実習生に対する事故防止・安全についての説明～』
石川昭義・大野木裕明・伊東知之2009年『保育士のヒヤリハット
体験』仁愛大学研究紀要人間生活学部篇創刊号
日本音楽療法学会<http://www.jmta.jp/2013.3.9>
福祉新聞2012年11月12日特集福祉人材～どう確保しどう育てるか
H.W.ハインリッヒ／D.ピーターセン／N.ルース著 井上蔵恭監
修 (財)総合安全工学研究所訳 昭和57年4月『ハインリッヒ産
業災害防止論』海文堂